

高校生のキャリア教育プログラムの開発と実践に関する研究

進路選択に対する自己効力感の分析を通して

山本幸生

(兵庫県立加古川南高等学校)

本研究では、生徒の主体的な進路選択を促すためにキャリア教育分野と道徳教育分野と学級経営分野からなるキャリア教育プログラムが開発された。その有効性を検討するために、本プログラムを受講した57名の生徒（就職志望クラスの生徒21名、専門学校・短大進学クラスの生徒26名）の他に、受講しなかった38名の生徒が統制群として設定され、プログラムの開始前と中間時（2回）と終了時の合計4回において、進路選択に対する自己効力感尺度の5つの下位尺度を測定する質問紙に回答した。その結果、6月から10月の期間において「進路選択に対する自己効力感」全体の平均値に関して、就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラス、および統制群よりも有意に大きく上昇していた。本研究の結果、コミュニケーション能力を高めるため、主に3つの取り組みを行い、自己効力感を形成している主要な4つの情報源に影響を与えることによって、結果的に進路選択に対する自己効力感を高めることができると推測された。

キーワード：キャリア教育，進路選択，自己効力，コミュニケーション能力，主要な情報源，高校生

山本幸生：兵庫県立加古川南高等学校・教諭，〒675-0112 兵庫県加古川市平岡町山之上139-3

E-mail: yamanoue261357@yahoo.co.jp

A Study on Development and Practice of a Career Educational Program of High School Students : An Analysis of Self-Efficacy Regarding Career Decision Making

Kosei Yamamoto

(Hyogo pref. Kakogawaminami High School)

In this study, a career educational program which consisted of lessons in career education field, in moral education field and in class management field was developed to inspire students to select their future course independently. To examine its effectiveness, 57 students (21 students hope to get a job, while 26 students hope to enter professional school or junior college) who attended the program (experiment group) and 38 students who didn't take the program (control group) answered the questionnaire, which was composed of five sub-factors of self-efficacy scale regarding career decision making, at four occasions: pre intervention, mid intervention (twice) and post intervention. The results of an analysis of variance yielded significant effects showing that the average of self-efficacy of students who hope to get a job increased more than that of students who hope to enter professional school or junior college and that of the control group, at a period from June to October. Results of this study suggested that three approaches to enhance communication competence have an influence on four major sources of information which form self-efficacy, and as a result, students can heighten self-efficacy regarding career decision making.

Key Words : career education, career decision making, self-efficacy, communication competence, major sources of information, high school student ,

Kosei Yamamoto: Teacher, Hyogo pref. Kakogawaminami High School, 139-3, Yamanoue, Hiraokacho, 139-3 Kakogawa-city, Hyogo 675-0112 Japan. E-mail: yamanoue261357@yahoo.co.jp

1 目的

本研究は、A高校3年次で開講される学校設定科目「キャリアデザイン」の中で行われた実践研究である。「キャリアデザイン」は主に高校卒業後、就職を希望する生徒を対象に開講されている。A高校のような総合学科は、2年次、3年次では選択の授業が多くなるため、クラスの凝集性が低くなる中、他者との関係性の中で、個人の内面に働きかけて自己理解を深めることが必要である。また、最近の高校生に多く見られるルール違反などの規範意識の希薄さや社会性の欠如、さらに、就職試験を控えてのコミュニケーション力の向上という課題もある。そのような課題がある中で、キャリアデザインの目標（自己の適性能力を把握し、社会で要求される付加価値の向上を目指す。具体的には表現力や折衝力など対人能力や思考力や理解力および積極性、自立性、協調性などが有機的に統合された目標遂行能力の向上を目指す。）に沿った心の教育総合プランとして、キャリア教育分野、道徳教育分野、学級経営分野からの働きかけを含んだキャリア教育プログラムの開発を行い、その有効性についての検証を目的とした。

2 キャリア教育プログラムの開発

(1) キャリア教育実践プログラムの背景となる理論

自己効力理論

自己効力理論はバンデューラ (Bandura.A) が提唱した理論である。彼によると、自己効力は、「ある状況において要求された行動を成功裏に行うことができる確信」⁽¹⁾と定義している。また安達によれば、人は何かを選択するときや行動を起こすときに、うまくできるかどうかを判断するために自分の能力を見積もることがあり、これが自己効力である⁽²⁾と説明している。

自己効力は、主要な4つの情報源（「遂行行動の達成」、⁽³⁾「言語的説得」、⁽⁴⁾「代理的経験」、⁽⁵⁾「情動的喚起」）によって基礎づけられている。言い換えれば、自己効力は、この4つの情報源から影響を受ける。つまり、この4つの情報源から働きかけることによって自己効力を高めることができるのである。

4つ中でも「遂行行動の達成」は、個人が自分で行動して必要な行動を達成できたという経験であるから、これを情報源とする自己効力は最も強く安定したものになる⁽⁴⁾。また、「キャリアデザイン」の授業の中では、主として「言語的説得」という情報源から自己効力感を高める取り組みをする。「言語的説得」は、強力な説得の方法を反復して用いれば、やがて、自己効力を高め、強め、広げることが幾分かは期待できようが、言語的説

得だけで高められ、強められた自己効力は、現実の困難に直面してたやすく消失することがあり得る。言語的説得は遂行行動の達成に導くための一時の補助的手段として、それが実行によって確認されてはじめて確固たるものとして機能する⁽⁵⁾。

進路選択に対する自己効力

ハケット (Hackett.G.) とベッツ (Betz.N.E.) は、進路関連領域に、自己効力概念を適用し、女性の職業発達に関する研究を行っている⁽⁶⁾。その後、テイラー (Taylor,K.M.) とベッツ (Betz,N.E.) は自己効力概念を進路選択行動と関連づけ、進路を選択・決定する過程で必要な行動に対する遂行可能感を指す、「進路選択に対する自己効力」という概念を提唱している⁽⁷⁾。

「進路選択に対する自己効力」は日本でもその研究が行われ、浦上が高校生用の「進路選択に対する自己効力尺度」を作成している⁽⁸⁾。しかし、この尺度項目は進学希望者を意識した質問項目であり、「キャリアデザイン」を受講している対象生徒には適合しないため、本研究では大濱の作成した「進路選択に対する自己効力測定尺度 (25項目版)⁽⁹⁾」を「キャリアデザイン」の中での実践プログラムの効果検証として使用する。

「主体的な進路選択の能力」と「進路選択に対する自己効力」の関係

進路指導の定義の中に、「生徒の自己指導能力の伸長を目指す」⁽¹⁰⁾という表現がある。また、『接続答申』のキャリア教育の定義の中に、「主体的に進路を選択する能力・態度を育てる」⁽¹¹⁾という文言がある。以上のことから、進路指導・キャリア教育は、教師の組織的・計画的な指導・援助を通して、生徒の「主体的に進路を選択する能力」を育成するところに究極のねらいをおく教育活動であると解釈できる。文部省によれば、「主体的な進路選択の能力」は「自己の進路を自主的・自律的に選択する意思・意欲・態度などの諸能力の全体の集合体」⁽¹²⁾と定義され、この能力は進路設計を進める力である“進路の計画力”と進路についての意思を決定する力である“進路の選択力”に分類されている。進路の計画力は理解力、探索力、立案力から、進路の選択力は総合力、決断力、実践力から構成されている。

一方、浦上によれば、「主体的な進路選択力」と比較的類似した内容を持つ概念が「進路選択に対する自己効力」であると指摘している。つまり、「進路選択に対する自己効力」は、その名の示すとおり進路選択を選択する心理的な力、すなわち進路の選択力を示すと考えられる⁽¹³⁾。さらに、自己効力は「できる」という行動に対する可能感であるが、福島が指摘するように、「こういうふうに」という行動のプランやストラテジーと呼ば

れるものと1つに結びついている⁽¹⁴⁾。その点で、進路選択を計画する力、すなわち進路の計画力も示していると考えられる。

以上の理由により、「進路選択に対する自己効力感」を実践プログラム実施前・中・後に計ることによって、実践プログラムの進路の選択力や進路の計画力に対する効果の検討と実践プログラムを改善するときの視点を得ることができる。

(2) キャリア教育プログラム

表1「キャリアデザイン」における各回のテーマ

回	日付	テーマ
1	4.11	自己紹介・オリエンテーション、アンケート
2	4.14	「フリーター」を考える
3	4.21	社会常識を学ぶ(1)
4	4.25	社会性・道徳性の発達検査、進路選択に対する自己効力感調査
5	4.28	社会常識を学ぶ(2)
6	5. 2	総合学科について
7	5. 9	ライフプラン
8	5.12	社会常識を学ぶ(3)
9	5.16	ライフロール
10	5.19	社会常識を学ぶ(4)
11	5.26	私にとっての仕事の意味
12	5.30	キャリアアンカー
13	6. 2	自己PRの情報集め(1)
14	6. 6	自己PRの情報集め(2)
15	6. 9	就職面接指導(ビデオ視聴①)
16	6.16	就職面接指導(ビデオ視聴②)
17	6.20	好きな役割、進路選択に対する自己効力感調査
18	6.23	面接指導1(面接質問紙完成)
19	6.27	面接指導2(面接質問紙完成)
20	6.30	“就職”→面接指導3(実践) “専門”→社会常識を学ぶ(5)
21	7.11	“就職”→面接指導4(実践) “専門”→社会常識を学ぶ(6)
22	7.14	“就職”→面接指導5(実践) “専門”→社会常識を学ぶ(7)
23	9. 5	接遇マナー講座
24	9. 8	“就職”→面接指導6(実践) “専門”→携帯リテラシー教育

25	9.12	“就職”→面接指導7(実践) “専門”→アサーショントレーニング 進路選択に対する自己効力感調査
26	9.19	「話し合いのルール」を考える
27	9.22	クレジットカード(1)
28	9.29	クレジットカード(2)
29	10. 6	“就職” →「働くこと」の意味を考えよう “専門” →クレジットカード(3)
30	10.10	缶コーヒー
31	10.17	社会性・道徳性の発達検査、 進路選択に対する自己効力感調査

注)表の中の“就職”は就職志望クラスを“専門”は専門学校・短大進学クラスを表す。

(3) 各授業の内容

各授業の内容は既存の様々なワークを紹介した書籍などを参考に構成した⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾。

「フリーター」を考える

正規社員と非正規社員の生涯賃金の差などを学ぶ。その後、3人の「フリーター」についての話を読んで、「フリーター」のイメージと「フリーター」の現実との差を認識し、「フリーター」について考える。

社会常識を学ぶ(1)~(7)

日本語運用能力検定試験2級および3級の問題演習を通して、基本的な言語習慣と日本語の理解力・表現力を学ぶ。

総合学科について

総合学科が設立された高等学校教育改革の理念を学ぶ。就職面接や入学試験面接に対応できるように、本校で行われているキャリア教育について理解を深める。

ライフプラン

生まれてからこれまでの出来事、また将来の出来事に伴う感情の起伏を曲線に描くことによって、長期的な視点で人生を捉え、人生に対する肯定的な態度を育む。

ライフロール

スーパー (Super, D.E) の提唱した人生役割 (ライフロール) を、人生の中でどのように果たしていくかを考える。

私にとっての仕事の意味

82枚の価値観カードの中から、仕事に就く時に優先する価値観カードを20枚選択し、それらをグルーピングすることによって、仕事をする上で何に価値を置くかを明確にする。

キャリアアンカー

8人の仕事に対する意見を読み、それぞれを比べていく中で、シャイン (Schein, E.H) の提唱した概念である「キャリアアンカー (抛り所となるもの)」を明確にし、個人のキャリアの方向性を考える。

自己PRの情報集め (1) ~ (2)

「ジョハリの窓」という考え方を使得、他者から自分の知らない長所を教えてもらい、面接試験での「自己PR」の受け答えを作成する。

就職面接指導 (ビデオ視聴)

就職面接のビデオを視聴することによって、面接試験での立居振舞や言葉遣いなどを学習する。

好きな役割

ホランド (Holland, J.L) の職業選択理論に依拠した授業である。キャンプの実行委員になった時に、6つの役割の中からどの役割をしたいかを選択し、その役割を選んだ理由や、何が面白そうかを考え、自分のパーソナリティや職業興味の方向性を探索する。

面接指導 1 ~ 7

担当教員との1対1での面接練習を通して、立居振舞いや質問に対して明確に発言できるようにする。

接遇マナー講座

「人に与える印象をよくする」ために注意することや、挨拶・返事・言葉遣い・電話のかけ方などに関する接遇マナーを学ぶ。

携帯リテラシー教育

若者言葉や顔文字・絵文字のマイナス面を学び、誤解のないコミュニケーションのあり方について話し合い、理解を深める。

アサーショントレーニング

実生活の中で「断り方のスキル」・「頼み方のスキル」をロールプレイを通して体験し、その重要性を理解し、スキルの定着を図る。

「話し合いのルール」を考える

話し合いのときに大切なルールを、文化祭の時の話し合いを想起しながら考える。

クレジットカード (1) ~ (3)

読み物資料を読んで、望ましい生活習慣・節度節制について「話し合い活動」を通して考える。

「働くこと」の意味を考えよう

DVDを見て、理想の現実・勤労・社会への奉仕について「話し合い活動」を通して考える。

缶コーヒー

読み物資料を読んで公德心・社会連帯について「話し合い活動」を通して考える。

3 方法

(1) 調査対象者

近畿地方のある県立高校 (1校、総合学科) で、本プログラムを受講した57名の生徒 (就職志望クラスの生徒21名、専門学校・短大進学クラスの生徒26名) を実験群とし、受講しなかった四年制大学進学クラスの生徒38名を統制群とし調査の対象とした。

(2) 調査内容

実践プログラムの検証として「進路選択に対する自己効力測定尺度 (25項目版)」を用いた。この尺度は、次の5つの因子 (「内容の明確さと進路選択」, 「情報収集と計画立案」, 「アドバイスの活用」, 「進路変更の柔軟性」, 「意思の強さ」) で構成されている。

項目内容について「できると思う自信の程度」を、「非常に自信がある」から「全く自信がない」までの5段階で回答してもらった。「非常に自信がある」から「全く自信がない」までを5~1点とし、その合計得点を「進路選択に対する自己効力得点」(以下自己効力得点と記述する) とした。また、各因子を代表する項目の合計を下位尺度得点とした。

(3) 調査手続き

実験群、統制群ともに調査目的を説明し、実験群に対しては、「キャリアデザイン」の授業の中で実施した。一方、統制群に関しては、ホームルームの時間や朝と帰

りのショートホームルームの時間に担任を通して実施してもらった。

調査は本プログラムの開始直後(4月),夏休み前(6月),夏休み直後(9月),プログラム終了後(10月)の計4回行った。

(4) 調査時期

2004年4月25日~2004年10月17日

4 結果

「進路選択に対する自己効力測定尺度」について,プログラム実施群と実施しなかった統制群の間に違いが見られるかを統計的に検討した。なお,統制群である四年制大学進学クラスは,4月時点での測定ができなかったため,4月からの変化に関しては,残りの実験群である就職志望クラスと専門学校・短大進学クラスについてのみ検討した。

(1) 期間ごとの平均値の変化

自己効力得点および下位尺度得点について,クラス別の3つの期間(4月から10月の間,6月から9月の間,6月から10月の間)での得点の差を個人ごとに算出し,それぞれの変化得点とし,表2~4に示した。正の値であれば得点の上昇を,負の値であれば得点が下降したことを示す。

なお,表の中のクラス表示に関しては,就職志望クラスは「就職」,専門学校・短大進学クラスは「専門学校」,四年制大学進学クラスは「大学」と表している。

4月から10月

プログラムを実施した4月から10月の間の自己効力得点の差の平均をクラス間でt検定した結果,有意差が検出された。(t(33)=2.55,p<.05)。表2に示すように,就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラスよりも自己効力得点が大きく上昇していた。

下位尺度では,「意志の強さ」(t(33)=3.65,p<.01)で有意差がみられ,「内容の明確さと進路選択」(t(33)=1.97,p<.10),および「情報収集と計画立案」(t(33)=2.00,p<.10)で差のある傾向がみられた。比較の結果「意志の強さ」で,就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラスよりも有意に大きく得点が上昇していた。また,「内容の明確さと進路選択」,「情報収集と計画立案」でも,就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラスよりもそれぞれ有意に大きく得点が上昇する傾向であった。

表2 クラス別の自己効力得点と下位尺度得点における変化得点の平均値と標準偏差(4月-10月)

クラス	就職	専門学校	t値
自己効力得点 全体	0.64 (0.61)	0.21 (0.39)	2.55**
内容の明確さと 進路選択	0.72 (0.75)	0.28 (0.56)	1.97*
情報収集と 計画立案	0.94 (1.06)	0.38 (0.49)	2.00*
アドバイスの 活用	0.67 (0.68)	0.27 (0.74)	1.68
進路変更の 柔軟性	0.48 (0.85)	0.33 (0.50)	0.64
意志の強さ	0.42 (0.61)	-0.22 (0.42)	3.65***
人数	17	18	

()内は標準偏差 † p<.10, * p<.05, ** p<.01

6月から9月

プログラムを実施した6月から9月の間の自己効力得点の差の平均をクラス間で分散分析した結果,有意差が検出された(F(2,68)=4.64,p<.05)。多重比較の結果,就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラス,四年制大学進学クラスよりも自己効力得点が大きく上昇していた。

下位尺度では,「情報収集と計画立案」(F(2,68)=7.58,p<.01)および「アドバイスの活用」(F(2,68)=5.40,p<.01)で有意差がみられた。また,「内容の明確さと進路選択」(F(2,68)=2.76,p<.10)で差のある傾向がみられた。多重比較の結果「情報収集と計画立案」では,就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラス,四年制進学クラスよりも,「アドバイスの活用」では,就職志望クラス,四年制進学クラスの方が専門学校・短大進学クラスよりも有意に大きく得点が上昇していた。また,「内容の明確さと進路選択」では,就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラスよりも有意に大きく得点が上昇する傾向であった。

表3 クラス別の自己効力得点と下位尺度得点における
変化得点の平均値と標準偏差(6月-9月)

クラス	就職	専門学校	大学	F値
自己効力得点 全体	0.48 (0.42)	0.09 (0.30)	0.24 (0.41)	4.64 ^{**}
内容の明確さ と進路選択	0.54 (0.71)	0.12 (0.41)	0.27 (0.50)	2.76 ^{**}
情報収集と 計画立案	0.76 (0.65)	0.11 (0.45)	0.26 (0.51)	7.58 ^{***}
アドバイスの 活用	0.55 (0.54)	0.01 (0.32)	0.29 (0.53)	5.40 ^{***}
進路変更の 柔軟性	0.38 (1.05)	0.07 (0.48)	0.20 (0.65)	0.78
意志の強さ	0.18 (0.42)	0.12 (0.64)	0.16 (0.64)	0.04
人数	17	18	36	

()内は標準偏差 † p<.10, * p<.05,
** p<.01

6月から10月

プログラムを実施した6月から10月の間の自己効力得点の差の平均をクラス間で分散分析した結果、有意差が検出された(F(2,68)=4.65,p<.05)。多重比較の結果、就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラス、四年制大学進学クラスよりも自己効力得点が大きく上昇していた。

下位尺度では、「情報収集と計画立案」(F(2,68)=5.00,p<.01)で有意差がみられた。「内容の明確さと進路選択」(F(2,68)=2.40,p<.10)、および「アドバイスの活用」(F(2,68)=2.78,p<.10)で差のある傾向がみられた。多重比較の結果「情報収集と計画立案」では、就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラス、四年制大学進学クラスよりも有意に大きく得点が増加していた。また、「内容の明確さと進路選択」では、就職志望クラスの方が四年制大学進学クラスよりも、「アドバイスの活用」では、就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラスよりもそれぞれ有意に大きく得点が増加する傾向であった。

表4 クラス別の自己効力得点と下位尺度得点における
変化得点の平均値と標準偏差(6月-10月)

クラス	就職	専門学校	大学	F値
自己効力得点 全体	0.49 (0.43)	0.11 (0.27)	0.21 (0.42)	4.65 ^{**}
内容の明確さ と進路選択	0.44 (0.66)	0.10 (0.37)	0.12 (0.54)	2.40 ^{**}
情報収集と 計画立案	0.74 (0.60)	0.26 (0.55)	0.27 (0.51)	5.00 ^{***}
アドバイスの 活用	0.46 (0.47)	0.06 (0.53)	0.17 (0.55)	2.78 ^{**}
進路変更の 柔軟性	0.52 (0.88)	0.11 (0.39)	0.28 (0.78)	1.39
意志の強さ	0.31 (0.57)	0.03 (0.34)	0.22 (0.64)	1.09
人数	17	18	36	

()内は標準偏差 † p<.10, * p<.05,
** p<.01

5 考察

(1) プログラムの有効性について

ここでは、コミュニケーション能力の育成と、主体的な進路選択能力の育成という2つの視点から、プログラムの有効性について考察する。

コミュニケーション能力の育成が「進路選択に対する自己効力感」を高める有効性

効果検証の結果、4月から10月の期間において「進路選択に対する自己効力感」全体の平均値に関して、就職志望クラスの方が専門学校・短大進学クラスよりも有意に大きく上昇していた。これを、自己効力の主要な4つの情報源⁽¹⁸⁾から考察した。

自己効力は操作可能であり、「キャリアデザイン」の中での実践授業では、生徒のコミュニケーション能力を育成するため、主に3つの取り組みを行ってきた。

まず第1に、キャリア教育分野や学級経営分野の授業では、お互いのワークシートを見て、参考になるところや良いところをポストイットに書いて交換することによって、コミュニケーションを促進させてきた。この取り組みは、「言語的説得」に当たるとされるが、「キャリアデザイン」の第9回の「ライフロール」の授業から継続的に行ったため、自己効力感を高めるのに効果があったと考えられる。

第2に、就職志望者に対して、上記の取り組み以外に、

面接指導の中で、面接のビデオを視聴させ、生徒が質問に対して明確に発言できるように、教員が言葉による丁寧な指導を何度も行った。面接ビデオを見ることによって、生徒はどのように入社試験では受け答えをすればいいのかをモデリングし、「代理的経験」を持つとともに、教員から「言語的説得」に当たるものを与えられたと推察される。また、入社試験で志望の会社に合格することによって、「遂行行動の達成」が導かれ、これまでの「言語的説得」は確固たるものとして機能し、自己効力感を高めたと考えられる。

第3に、第26回～第30回の「話し合い活動」の授業では、課題に対して共同で、しかも、理由・根拠を追求しながら話し合って解決していく過程を経験させた。他者の発言の様子を観察することによって、発言の仕方を学び、人前でしゃべることへの不安の代理解消（代理的経験）がなされたと思われる。また、「話し合い活動」の授業では、「誰も自分の意見を邪魔されてはならない」ということを含んだ6つのルールを作り、それに従って話し合いを行った。そのため、授業を重ねる毎に、クラス内には安心感と解放的な雰囲気がつくられてきた（情動的喚起）。さらに、グループで話し合いをさせ、その後発表させたことにより、発表者は、他のメンバーから「大丈夫、うまく話せるよ」と励まされ（言語的説得）、人前で自分の意見を言えた、うまく話せた、しっかり聞いてもらえたという成功体験を持った（遂行行動の達成）。これらのことが自己効力感を高めた要因ではないかと推察される。このように、「話し合い活動」の授業は、「遂行行動の達成」、「代理的経験」、「言語的説得」、「情動的喚起」という4つの情報源から働きかけを行ったと考えられる。

以上のように、コミュニケーション能力を高めるための3つの主要な取り組みの中で、自己効力感を形成している4つの情報源に影響を与えることによって、結果的に進路選択に対する自己効力感も高めることができた可能性があると思われる。

実践プログラムの「主体的な進路選択能力」育成への有効性

『接続答申』によれば、キャリア教育では「主体的に進路を選択する能力・態度」を育成することが述べられている⁽¹⁹⁾。浦上は、「主体的な進路選択力」と比較的類似した内容を持つ概念を「進路選択に対する自己効力」であると説明している⁽²⁰⁾。また、「進路選択に対する自己効力尺度」の中には「主体的な進路選択能力」の要素（進路計画力・進路の選択力・意思の強さ）が下位尺度として含まれている。

「進路選択に対する自己効力感」調査において、4月から10月の期間でt検定を行った結果、下位尺度であ

る「意志の強さ」の得点の平均値に関して、就職志望クラスの方が、専門学校・短大進学クラスよりも有意に大きく上昇していた。また、「内容の明確さと進路選択」、「情報収集と計画立案」についても、就職志望クラスの方が、専門学校・短大進学クラスよりも上昇する傾向がみられた。これらのことより、この実践プログラムは、就職志望クラスの生徒に、専門学校・短大進学クラスの生徒よりも、主体的な進路選択能力を育むことができたと推察される。

以上の結果によってキャリア教育の目標としている「主体的に進路を選択する能力」の育成も就職志望クラスの生徒においては達成できたと考えられる。

(2) 今後の課題

本研究での問題点および課題は、以下の3点である。

サンプリングの問題

本研究は、授業を実施しているクラスでの集計を優先したため、各群に純粋にその名称に値しないものが若干混入してしまった。すなわち、就職志望クラスの中には専門学校・短大進学希望者、専門学校・短大進学クラスの中には就職志望者が数名いた。人数が少ないので大きな影響は無いにしても、この点は、今後の調査に置いて、十分留意する必要がある。また、統制群のアンケート調査を6月より行ったため、プログラム実施の最初から実験群との統計上の比較ができなかった。

専門学校・短大進学クラスの生徒の必要性に合うプログラムの開発

効果検証において、「キャリアデザイン」の中で実践したプログラム全体において、「進路選択に対する自己効力感」に対して就職志望クラスの生徒には統計上効果が認められたが、専門学校・短大進学クラスの生徒は、統計上の効果が認められなかった。専門学校・短大進学クラスの生徒に効果の上がるプログラムを作成する必要がある。

1・2年次での「進路選択に対する自己効力感尺度」の有効性の検討

「進路選択に対する自己効力感」が高まれば、「主体的な進路選択能力」が育成されることが示唆されたので、「進路選択に対する自己効力感」調査の結果を担任に伝え、担任は個人面接などの資料として進路指導に役立てることを考える必要がある。また、本研究は3年次での実施であったので、1年次、2年次でも「進路選択に対する自己効力感」尺度が生徒理解に対する有効な手段になりうるかを、試行・検討する必要が考えられる。

引用文献

- (1) Bandura, A. "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change," *Psychological Review*, Vol.84, No.2, 1977, pp.191-215.
- (2) 安達智子「社会的認知理論」日本キャリア教育学会(編)『キャリア教育概説』東洋館出版社,2008,p.70.
- (3) 福島脩美「自己効力(セルフ・エフィカシー)の理論」祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊(編)『社会的学習理論の新展開』金子書房,1985,p.40.
- (4) 同上書, p.40.
- (5) 同上書, pp.41-42.
- (6) Hackett, G. & Betz, N.E., "A self-efficacy approach to the career development of women," *Journal of Vocational Behavior*, Vol.18, 1981, pp.326-339.
- (7) Taylor, K.M. & Betz, N.E., "Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision," *Journal of Vocational Behavior*, Vol.22, 1983, pp.63-81.
- (8) 浦上昌則「進路決定に対する自己効力測定尺度作成の試み」『日本教育心理学会第33回総会発表論文集』,1991, pp.453-454.
- (9) 大濱裕司「高校生の進路選択に対する自己効力の変容についての研究」兵庫教育大学大学院学位論文,1999.
- (10) 文部省『中学校・高等学校進路指導の手引 高等学校ホームルーム担任編』日本進路指導協会,1975,p.4.
- (11) 文部科学省『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』,1999,p.9.
- (12) 文部省『中学校・高等学校進路指導の手引 第16集 主体的な進路選択力を育てる進路指導 進学指導編』日本進路指導協会,1985,p.23.
- (13) 浦上昌則「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)』第42巻, 1995,p.115.
- (14) 福島脩美,前掲書,1985,p.44.
- (15) 小野田博之『自分のキャリアを自分で考えるためのワークブック』日本能率協会マネジメントセンター,2005.
- (16) 國分康孝(監修)『エンカウンターで学級が変わる 高等学校編』図書文化,1999.
- (17) 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志(編)『教室で学ぶ「社会の中の人間行動」』明治図書,2002.
- (18) 福島脩美,前掲書,1985, p.40.
- (19) 文部科学省,前掲書,1999,p.9.
- (20) 浦上昌則,前掲書,1995,p.115.

謝 辞

本論文の作成にあたりご指導いただいた兵庫教育大学大学院,心の教育実践コースの渡邊満先生,古川雅文先生,淀澤勝治先生はじめ,コースの諸先生に厚く感謝申し上げます。

(2009.8.31受稿,2009.11.19受理)